短歌に親しむ（1）

栗木京子

A くれなゐ(イ)の二尺伸びたる薔薇の芽の針やは(ウ)らかに春雨のふる　　正岡子規

　四季の変化に富む日本では、季節の情感を大切にしながら短歌が作られてきました。この歌は「くれなゐ」（紅色）という色彩や「二尺」（約六十・六センチメートル）という長さによって、薔薇の芽を丁寧に描写しています。さらに、薔薇のとげを「針」と表現し、「針やはらかに」と続けたところが巧みです。新芽のとげのみずみずしく柔らかな様子が伝わってきます。「くれなゐの」「薔薇の芽の」「春雨の」と、助詞「の」が続いていることも、歌に優しさを添えています。

B 夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり　　与謝野晶子

（中略）牧場の若い馬たちが気持ちよさそうに風に吹かれています。「三百」は、たくさんという意味で使われていますが、「たくさんの牧の若馬」よりも「三百の牧の若馬」と表現したほうが鮮やかな印象を残します。数量や順序を示す語を「数詞」といいますが、ここでは数詞を生かすことで情景に臨場感が備わっているといえるでしょう。遠い山に向けられていた視線が、やがて牧場へと下り、最後には目の前の若馬の耳に移っていきます。こうした動きが歌の中に爽やかな流れを作り、言葉の背後から生命への賛歌が聞こえてくるようです。

短歌の基礎知識

●定型

短歌は**五・七・五・七・七**の三十一音からなり、三十一文字とも呼ばれる。五・七・五・七・七はそれぞれ、

　初句・二句・三句・四句・結句

といい、また、五・七・五を上の句、七・七を下の句という。定型より音数が多いものを**字余り**、少ないものを**字足らず**という。

●句切れ

一首の中での言葉や意味の切れ目を句切れという。言い切りの表現があるところなどに句切れがある。

・初句切れ……五／七・五・七・七
・二句切れ……五・七／五・七・七
・三句切れ……五・七・五／七・七
・四句切れ……五・七・五・七／七

句切れがない歌（句切れなし）や、句切れが二か所以上ある歌もある。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aの歌の説明として適当なものを選びなさい。

ア 助詞「の」の繰り返しが、柔らかなリズムを生んでいる。
イ 「針」という表現から、とげの鋭さや硬さが感じられる。
ウ 激しい雨に打たれるみずみずしい新芽がうたわれている。

〔　　〕

(2) Aの歌には助詞「の」がいくつ含まれるか。漢数字で答えなさい。

〔　　〕

(3) Bの歌の説明として適当なものを二つ選びなさい。

ア 「三百」は牧場にいる馬の正確な数を表している。
イ 「三百」という表現が、鮮やかさや臨場感を与えている。
ウ 視線は若馬の耳から、最後は遠くの山に移っていく。
エ 視線は遠くの山から牧場に下り、若馬の耳へと移っていく。

〔　　・　　〕

(4) Bの歌に含まれる数詞を書きぬきなさい。

〔　　〕